

Title	タゴールの小説「ゴーラ」にみるインド・ルネサンス
Author(s)	溝上, 富夫
Citation	大阪外国語大学学報. 21 p.217-p.228
Issue Date	1969-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80361
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

タゴールの小説「ゴラ」にみる

インド・ルネサンス

溝 上 富 夫

ঃ রবীন্দ্রনাথের ‘গোরা’ ও ভারতীয় নব-জাগরণ ঃ

— তামিও মিজোকামি —

ঊনবিংশ শতাব্দীর বাংলার যুগ পুরুষ রবীন্দ্রনাথ ঠাকুরের অন্যতম ম্লেচ্ছ উপন্যাস ‘গোরা’ । ‘গোরা’ গ্রন্থাকারে প্রকাশিত হয় ১৩১৪ বঙ্গাব্দে । ‘গোরা’ রচনার সামাজিক পরিবেশ ঊনবিংশ-বিংশ শতাব্দীর নবউদ্বোধিত সুদেশ চৈতন্য ও ধর্মীয় আন্দোলন । রবীন্দ্রনাথ ‘গোরা’ উপন্যাসের বিভিন্ন চরিত্রকে কেন্দ্র করে তৎকালীন বাংলার সামাজিক, ধর্মীয় ও রাষ্ট্রনৈতিক চৈতন্য, শিক্ষিত মধ্যবিত্ত নরনারীর যুক্তি, তর্ক, আদর্শের নৈতিক স্বল্প সজ্জাত চিত্তবিক্ষোভকে কিভাবে প্রভাবিত করেছিল, তারই পরিচয় দিয়েছেন ।

রবীন্দ্রনাথের কল্পনায় গোরা একটি জাতীয় বীর চরিত্র । গোরার চরিত্রের মধ্যে দিয়েই তৎকালীন ধর্মীয় সংস্কার ও আদর্শের সংঘর্ষ সুযুক্তিবদ্ধ বিচারের দ্বারা বিশ্লেষিত হয়েছে । উল্লেখযোগ্য যে তৎকালীন ভারতের নবজাগরণের কেন্দ্র ছিল বাংলা দেশ । রবীন্দ্রনাথ ছিলেন শিক্ষিত বাঙালীদের প্রতিনিধি । এই কারণে, বাংলার বুদ্ধিজীবী সমাজ কিভাবে ভারতবর্ষের নবীন আদর্শের বিপ্লবকে প্রত্যক্ষ করেছিল ‘গোরা’ উপন্যাসে তার সজীব প্রতিচ্ছবি পাওয়া সম্ভব হয়েছে । গুরুত্বপূর্ণ বিষয় এই যে রবীন্দ্র-মানসে তৎকালীন নবজাগৃত ভারতের সমাজ ব্যবস্থার আদর্শ রূপটি কিভাবে ধরা পড়েছিল তা ‘গোরা’ উপন্যাসটি বিশ্লেষণ করলেই বোঝা যায় ।

এই বিষয়গুলির দিকে লক্ষ্য রেখেই ‘গোরা’ সম্বন্ধে এই সংক্ষিপ্ত প্রবন্ধটি রচিত হয়েছে ।

序

ラビンドラナート・タゴール¹⁾ (Rabindranath Tagore 1861—1941) は、近代ベンガリ文学の金字塔をうちたて、詩集「ギーターンジャリ」(神へ捧げる歌)によって、アジアで最初のノーベル文学賞を受賞したことは知られている²⁾。彼は詩のみならず、文学のあらゆるジャンル、また音楽、美術にもすぐれた才能を余すところなく示している。

「ゴーラ」³⁾ はタゴールの代表的長篇小説で、19世紀、ベンガル州を中心に吹きあれていた「インド・ルネサンス」とよばれる社会改革運動の嵐の中を、熱血的愛国青年ゴーラを中心とする知識階級が、いかに生きていったか、その思想的相剋や、当時の社会状況が見事に描写され、それ自身、一個の歴史書に値するほどの傑作である。しかも、友情論、恋愛論、女性問題、信仰の問題など個人の内面深くまでほり下げた心理小説でもある。タゴールはややもすれば、現実から逃避した夢想詩人として評価されがちだが、「ゴーラ」に関する限り、彼がいかに現実を透視する力に秀で、深い洞察力をもっていたかが分るだろう。代表的なベンガルのインテリだったタゴールが、インド・ルネサンスをどのようにみたかを「ゴーラ」によって考察したい。

I

19世紀のインドは、中世以来の疲弊、墮落した社会、「悲惨なまでにおくれた状態」⁴⁾ から目覚め、宗教・社会改革を行なって、インド近代化へのいわば黎明期である。その萌芽はすでに、18世紀後半にみられ、ヨーロッパ人による東洋学の勃興、プロテスタント伝道団の活躍と英語教育がインドに導入されたことなどが、この民族覚醒の外部的要因といわれる⁵⁾。これらの成果が、新しいインドの知識層を生み、彼らに自国の古代文化の偉大さを再認識させ、形式化したヒンドゥ教の純化の必要性を痛感させることになった。この意味で、インド・ルネサンスも宗教復興的性格を濃くしている。

ベンガルは英領インドの中心という政治的、地理的理由から、こうした外部からのインパクトに最も敏感に反応し、インド・ルネサンスの中心となった。そして、多くの指導者を輩出し、ここでの発展が basic pattern⁶⁾ となって、全インドに大きな影響を与えたのである。

ラージャ・ラーム・モーハン・ローイ (Raja Ram Mohan Ray, 1772—1833)こそは著名な指導者達の中でも、最も重要な社会改革者であった。彼はヴィシュヌ派のバラモンの家に生れ、12才のとき、パटनाでイスラムの宗教や学問を学び、イスラムの思想とくに偶像崇拜排斥に深く感化され、このことで父と衝突したため、家出をしたといわれる⁷⁾。

その後、チベットにわたって仏教を学んだり、ペナレスでサンスクリットを学んだり、キリスト教宣教師に交わって英語や西洋古典語を学び、西洋の学問、思想にも接した。こうした体験が、彼がヒンドゥ教の改革を志すのに、大きな影響を与えたのである。すなわち、キリスト教の科学的精神と回教の合理主義をヒンドゥ教に注入することによって、ヒンドゥ教の純正原理であるウパニシャド(彼によれば)の精神への調和をはかったのである。このような革新的な思想は、当然、正統派ヒンドゥの人々の受け入れるところとならず、異端視され、正統派と革新派の間では

げしい非難の応酬と論戦があった。「ゴーラ」はまさにこの両派の思想的対立を描いたものである。

1828年、彼はカルカッタに、ブラーフマ・サマージ（梵協会）を設立し、社会改革に着手し、多くの社会悪を除去することにつとめた。サティ⁸⁹（寡婦焚死）の廃止、幼児婚の禁止、一夫多妻制の禁止、寡婦の再婚の自由などに尽した彼の功績は、教育の普及をはかったことと相俟って、実に大きなものがある。彼はまた、カースト（種姓）制度を攻撃し、その完全な廃止を訴えた。また、彼は社会改革家としてのみならず、ベンガリ語の散文体を確立したことによって、ベンガリ文学史にもその位地を得ていることにも注目すべきである⁹⁰。

ラーム・モーハン・ローイ亡き後のブラーフマ・サマージを財政的に援助したのは、ドゥワルカナート・タゴール（Dwarkanath Tagore）であり、その息子のデーベンドラナート・タゴール（Devendranath Tagore, 1817—1905）がラーム・モーハン・ローイの後継者として、ブラーフマ・サマージの発展に尽した。彼こそ、ラビーンドラナート・タゴールの実父であり、その高潔な人格ゆえに、モホルシ（大聖）とよばれた。彼は、ヴェーダやウパニシャドへの信仰に篤く、サマージをより組織化するのに功績があった。ブラーフマ・サマージもケーシャブ・チャンドラ・セン（Keshab Chandra Sen, 1838—1884）の指導に入るや、急速にキリスト教化への傾斜を早め、ために、デーベンドラナートとの思想上の対立から、新・旧2つのサマージに分割されることになった。そして、新ブラーフマ・サマージも急進派と保守派に分れることになる。今日のブラーフマ・サマージは明白に、キリスト教と同様にヒンドゥ教の範疇外にあるとされているが¹⁰⁰、インド・ルネサンスにおけるブラーフマ・サマージの果たした役割は実に大きいといわねばならない¹¹¹。

II

熱情的な愛国の徒ゴウルモーホンはゴーラという親称で呼ばれ、その名の如く¹²⁰色白で、長身でがっちりした体格をしており、カレッジの先生は彼を「雪山」とよぶほどであった（p. 15）。太い声量、とがった鼻、するどい目つきなど一見して目立った身体的特徴は明らかにイギリス人の風貌を思わせるものがあり¹³、か細くて黒い母のアーノンドモイ、身体はがっちりしているがやはり色黒の父クリシュノドヤールとはどうみても似つかなかった。実は、小説の最後で明らかにされるが、ゴーラはセポイの乱¹⁴で死亡したアイルランド人の孤児であり、英軍の兵站部に勤務していたクリシュノドヤールは後妻であるアーノンドモイに、ゴーラの出生の秘密を絶対にもらさぬようさとして、ゴーラを養育させる。（p. 44）

アーノンドモイの愛情を一身に受けて成長したゴーラは、自分がインド人であり、由緒あるバラモンの生れであることを信じて疑わない。彼はかつて、ケーシャブ・チャンドラ・センの雄弁に魅せられて、ブラーフマ・サマージに入ったこともあったが（p. 37）、今は正統派ヒンドゥ教

徒として「ヒンドゥ愛国者協会」の会長をつとめて、愛国運動に挺身している (p. 15)。

ゴーラの親友で、「ヒンドゥ愛国者協会」の書記をしているビノイはいわゆる秀才型で、教養ある標準的なベンガル人らしく、つつましかで聡明である (p. 16)。原則的にゴーラと主義主張を同じくするが、ゴーラのように偏屈で排他的戦闘的ではなく、ブラーフマ・サマージとも交わりをもっていた。両親のないビノイはアーノンドモイを実の母のように慕い、アーノンドモイも彼とゴーラを実の兄弟のように愛していた (p. 104)。アーノンドモイはベナレスの高名なパンディットの孫娘にあたるが、それほどオーソドックスではなく、夫と共に永らくベンガル州を離れて住んだため、服装の点でもモダンであった (p. 22)。彼女は慈悲深いインドの理想婦人として描かれている。

なお、クリシュノダヤールの先妻の子モヒムとその妻ロッキー、その娘のショシーも登場し、ゴーラの弟子オビナーシュを加えて、以上が正統派ヒンドゥの代表として描かれる。

これに対して、革新派すなわちブラーフマ・サマージの会員として、ポレシュ家とハランが登場する。

ポレシュ翁はブラーフマ・サマージの理念を実践しているが、いつも温厚・寛容で正義感に富む。個人の自由と人間の平等を重んじ、カーストの弊害を説く。ゴーラと議論した後でも、この直情的な青年に対してやさしいことばをかけてさとする態度をとり (p. 72)、ついにはゴーラも彼を敬愛せずにはおれなくなる。娘の結婚問題でサマージの人々から中傷されても、彼は怒ることなくじっと耐える (p. 525)。寛容ということばを具現したようなこのポレシュ翁はタゴールの最も理想像とした人物にちがいない。あるいはまた、ラーム・モーハン・ローイのイメージを彼はポレシュ翁に見出したのかもしれない。

ポレシュの妻ボロダシュンドリーは社交好きで、生活面で派手好みであった。サマージ意識が強く、正統派ヒンドゥに対する憎しみも強く、養女のラーダーラーニーというヒンドゥ式の名をシュチョリタという名に変えたのもそのためである (p. 57)。

長女のラーボンノは母に似て社交好き話好きだが、日常のこまごまとした事柄にまで母の干渉を受けなければならない (p. 57)。

次女のロリタは感じやすく活動的な少女である。自分の意志をはっきりと主張し、男にもまけない勝気なところをもっている。困難を克服して、女子のために学校をひらいたり、英語劇を通じて親しくなったビノイとの真摯な恋に生き、ついにはサマージの反対を乗り切ってビノイと結婚する (p. 374—p. 375)。

三女のリーラは10才、英語を朗読してきいてもらうのが楽しみな明るい少女である (p. 58)。

ポレシュ家には2人の姉弟が養子としてポレシュ翁に育てられている。少女の名をシュチョリタといい、少年の名をショティーシュという。

シュチョリタは多情多感な少女で、宗教社会問題に強い探究心をもっている。最初ゴーラと意見を異にするが、彼の熱烈な愛国心には深い感動を覚え、そのゴーラと敬愛してやまぬ養父ポレ

シュとの意見の相違に悩んで泣くあたり (p.200), まこと「インドの女性の魂の音楽を感じるよう」¹⁵⁾である。伯母のホリモヒニーが彼女を頼ってボレシュ家に身を寄せてからは、ホリモヒニーがヒンドゥで偶像を崇拜するため、ブラーフマ・サマージでの評判が悪くなり、いろいろ中傷されるが、ゴーラにますます傾倒した彼女はついに自分がヒンドゥになることを宣言し、ゴーラをグル(導師)とする (p.497)。

ハランは熱心なブラーフマ・サマージの会員で、夜間学校の教師をしたり、新聞の編集をやったり、女学校の事務をやったり実に活動力のある青年である (p.116)。当時、英語教育を受けた多くの青年がそうであったように¹⁶⁾、彼もまた西欧文化への憧憬が強く、ややもすれば自国の文化遺産を軽侮する傾向があった (p.119)。ゴーラなどとの論戦でみられるように、彼の狭量でサマージ万能の権威主義は、将来を約束されていたシュチョリタとの仲を疎遠なものにし、彼女をサマージから離れさせることになった。彼の親キリスト教的思想はケーシャブ・チャンドラ・センの思想への傾倒によるものと思われるが、サマージの側にも、教条主義や権威主義があったことを、タゴールはハランという人物を通して鋭く衝いているのである。

III

ゴーラの祖国インドへの愛情は熱烈なものである。船長が四六時中、船のことを気にかけているように、彼の心はつねにインドのことを思っていた (p.31)。彼は自国に対するいかなる攻撃、侮辱もがまんすることができなかった。イギリスの宣教師が新聞でヒンドゥ社会を攻撃したとき、彼は猛然と反論を試み、「われわれが自国にあって、外国人の法廷で外国の法によって被告みたいに裁かれるのを許してはならない。」 (p.39) と主張した。

またある日、汽船の中で、一等客室にいたイギリス人とベンガル人が大衆を軽蔑しているのを見て、ゴーラは我慢しきれずに憤然とくっつかかる。インドの大衆を「無知な獣共」と軽蔑するベンガル人にゴーラは「無知よりも心無い者の方がずっと獣だ」 (p.62) と反撃するのである。動物にさえたとえられて¹⁷⁾、英国人から軽蔑されたインド人にとって、外国人からの恥しめに対するすなおな憤りであったにちがいない。

しかし、ゴーラは自国人の一部が外国人と一緒にあって自国民を軽蔑するのが何よりも耐えられなかった。そして、まずわれわれ自身がインドに対する誤ったイメージをたたきこわさねばならないことを訴える (p.32)。自分達だけの社会を形づくって、大衆から遊離してしまっている尊大な政府の役人にも激しい憤りを覚える (p.168)。改革派の人々にむかって「諸君が無教育と呼ぶ仲間に自分はいる。悪習と呼ぶところのものが自分の儀式だ。諸君が祖国を愛さぬ限り、また自国民と行動を共にしない限り、自分は諸君の口から自国への非難のことばをきくのが耐えられない。」 (p.79) とか、またビノイに向って、「われわれの今なすべきことは、祖国のあらゆるものに対して、忌憚のない、疑いのない、完全なる崇拜の念を表明することであり、祖国を信

じない者の心の中に、その崇拜の念をわき起してやることである。」(p. 33) というあたり、傲慢で、独善的なところがあり、イギリス人と交際すること自体をもってインドの侮辱とみたり、実際彼の愛国心はしばしば偏狭なまでに国粹的である。彼によれば、「愛」というものは、たとえば病気の子供が薬を飲まぬとき、母親は自分が健康であっても薬を飲むことによって、わが子と同一状態にあることを示すような崇高で絶対的なものであって、この愛情がなくして母と子が結ばれないように (p. 86)、われわれも祖国に対して絶対的な愛を捧げなければならないのだ。そして、彼は祖国への愛を誓って、ビノイと共に、生涯独身を通すことを決心する (p. 100)。

ゴーラはすべての生活面で、ヒンドゥの伝統を重んじ保守的だった。毎日、ガンジス河に沐浴して祈りをし、ガンジス河のどろを額につけていたが、その額のマークが自己の存在を他人、とくにブラーフマ・サマージの人々に対して誇示しているようなのが、シュチョリタの気に入らなかった (p. 78)。しかし、古い型の短い上着に肩掛けをかけ、腰布を身につけて国産の靴をはいている (p. 51) のは、後年はじまるスワーデシ (国産品愛用) 運動の先がけを示しているようで興味がある。

ゴーラはまた、「ヒンドゥとしての掟を守ることが母の愛情よりも大切である。」(p. 27) といひ、カースト制を厳格に守り (p. 23, p. 66)、女性問題にしても、女は人間社会で昼に対する夜の如く陰の部分にまわっているのが自然であるとして (p. 134) あたかも女性隔離を容認するような発言をする。こうした彼のオーソドックスな態度はモヒムをして、「ベナレスのパンディットよりも上手をいく頑迷家」(p. 103) といわせ、クリシュノドヤールも喜ばなかった。そのクリシュノドヤールはカーストに厳格な点、ゴーラよりも一層オーソドックスではあったが。

IV

ゴーラはつねに大衆と共に歩んだ。体裁のよい、みせかけの愛国心や書物上だけの祖国愛を憎んだ。祖国のために彼はどこへでも出かけて行って、自分の信条を実践で示したのである。彼は人一倍正義感と責任感が強く、人間の悩みをそのまま放任しておくことのできない性分で、大衆の苦しみを自分の苦しみとして受け取った。

ゴーラを敬愛する22才のノンドが破傷風で死んだが、父は医者を呼ぼうとしたが、母は悪魔がこの子にのりうつているといって、祈祷師を呼んだ。呪文をとなえたり、体を責苦しているうちにノンドはとうとう死んでしまったのだが、ゴーラにはこの母親の無知は笑えなかった。「この責苦は自分と自分の国を苦しめているみたい」(p. 128) だったのだ。

タゴールが「ギーターンジャリ」の104番¹⁸⁾で、「我いづこでも君を仰ぎみる、衆人のまん中に我が場所を授け給え」とうたった心境がゴーラの心境だったのだろう。

学生時代、奨学金の50ルピーを盗まれたときも、彼は飢饉で悩む人に寄附したと思って、むしろ喜ぶほどであった (p. 259)。

農民達が警官の横暴におののいているのをきいて、彼は司法官のところへ行って嘆願したが、きき入れられなかったので、自ら警官の暴力から農民を守る決意をする (p. 228)。

47人の農民が警察の陰謀で逮捕されたとき、彼は友人の弁護士に保釈をたのんだが断られたので憤然とする (p. 270)。

ある日、カルカッタで行なわれたクリケットの試合で、怪我をした学生を池の側に連れていって介抱しているところへ、警官がやって来て汚いことばで罵り、学生に暴行を加えたので、怒った学生達は警官にくっかかり、ゴーラも学生の側に立って警官ともみ合った。警官の職務を妨害したかどで彼は逮捕されたが、友人が保釈金をつけて釈放しようとするのを拒む (p. 230)。結局、彼は懲役一カ月の刑をうける (p. 237)。牢獄から母にあてた手紙に彼は「自分のことは心配しないように。あなたを悲しませたことだけが僕の罰です。もっと多くの母親の子たちが無実の罪で投獄されているのです。彼らと一緒に困苦を分けあうのが自分の願いです。この願いがかなえられたらといって、母さん悲しんではいけません。」 (p. 258) とかいた。「自分の運命をこの国の不幸な人々の運命と共にするのだ。」 (p. 233) このあたりに、彼の母を思う情と共に大衆への深い同情の念が強くあらわれている。

これよりさき、ゴーラははじめて農村へ行ったとき、農村の疲弊、荒廃ぶり、閉鎖性、農民の受動的、盲目的で無気力ぶりをつぶさにみて、大きな衝撃を感じる (p. 215)。都会の教養ある階層に比べて、ずっと農村の社会の束縛と因習の強いのもみた (p. 538)。

低いカーストでは女子の数が少ないがために、男子は結婚難であった。寡婦の再婚はきびしく禁止されていた (p. 540)。「ダコイト (盗賊) よりも警察の取調べの方が村にとって不幸であるように、父母の死そのものよりもその葬儀の方が不幸な理由」 (p. 53) であった。

村に火事があったとき、みんなが協力して困難を切りぬける力がいかに欠けているかを知ってゴーラはおどろいた。ただ、わめきながら逃げまどうのみで消火しようとしな。水が不足なのに井戸を掘ることを考えない。しかも、何度も火事が起ったにもかかわらず、その後も決して用水を作ることはしなかった。「神のいたづら」といってすますだけである。しかも、彼と同伴してこうした村の状態を視察したゴーラの同僚達が「小人共というのはこんなものだ。この連中はこんなことを別に苦しいこととも思っていないんだ。」 (p. 216) というのをきいて彼は愕然とする。

無知と冷淡の不幸の重荷が、老いも若きも富める者も貧しい者もインド人すべてにのしかかっていることからインドは進歩できないのだと分って、ゴーラは日夜悩みはじめるのであった。

なお、ホリモヒニーの不幸な身の上話は、女の地位とか結婚について考えさせられることである。娘をもった家庭にとって、持参金の重荷がいかに耐えがたいものか、またそのことが女性の生涯をいかに不幸にするかは読者の胸に迫るものがある (p. 290)。

ゴーラの宗教的信念はヒンドゥ至上主義であった。彼によれば、ヒンドゥというのは単なる集団ではなく、一つの民族である。この民族は実に巨大で、何か特別の名詞でもって定義づけられるものではない (p. 441)。ヒンドゥ教はさまざまな考えをもった人々を、母のように膝の上にだきかかえるよう努めてきた。つまり、世界でただヒンドゥ教のみが人間を人間として認め受け入れたのだ。そして、人々を特別の集団に属するものという見方はしなかった。賢者も愚者もみとめる。そして、一つの形としての知識のみを認めるのではなく、知識の多面的な発展を認める (p. 455)。神はいろんな形において永久の姿を顕したものであるから、一つの真理だけしか認めないものは永久の真理を認めないことになる (p. 172)。キリスト教は多様性を認めない。一方にキリスト教があり、さもなくば他方に破壊があるのみだ。われわれはキリスト教徒から教育を受けたために、この多様性をば羞恥の目でみるが、この多様性の中にもヒンドゥ教徒は統一を見出そうとしているのだ。

しかし、ゆがんだキリスト教教育から解放されない限り、ヒンドゥ教の精髓は理解されないだろうと説く (p. 445)。

インド文化の多様性とか統一とかいうことがよくいわれるが¹⁹⁾、ヒンドゥ教は多様性の中に統一を見出しているというのがゴーラの見方だったのだ。

また、西欧との比較に及び、インドの神像には想像力、知識、神への献身が根深く結び合わされており、インドの神は単に歴史的崇拝の対象ではなく、人間の古い哲学を顕示したものであるとして、インドの神像及び精神の西欧への優越を強調する (p. 489)。そして、偶像の奥義を理解せずして偶像を排撃するのは愚かだと、偶像崇拝を礼讃する (p. 65)。

伝統主義者のゴーラは当然歴史を重んじた。「過去は単に過ぎ去ったものとして葬りさるべきものではなく、過去はつねにわれわれと共に生きている」 (p. 143)。よって、「インドの過去の偉大さを否定することは無信仰に通ずるのだ」 (p. 444) と自分の保守主義の論拠を示す。

時代の変遷につれて、宗教や社会も変化するということを彼はまっ向うから否定するわけではないが、「時の推移というものは水の波のようなものであって、その波で堤防がこわれることがあるが、そのこわれることを容認することが堤防の義務だとは思わない。」 (p. 488) すなわち、彼は急激で無意味な変革を好まないのである。

彼の欲するのは、インドの変革はそれ自身の中で、つまりインドの土壌で行ないたいということである (p. 489)。「英国人がわれわれより強いからといって、英国人のようにならなければ彼らより強くなれないという考え方は誤っている。模倣によっては永久に不可能なことだ。インドの中へ入りこまねばならない。インドのあらゆる善・悪の中に身をおくべきだ。欠点があれば内から直さねばならない。しかし、自分自身の目でインドを見て考えなければならないのだ。」 (p. 169) 「インドの大気の下で太陽が見えるのに、海を越えてわざわざキリスト教会の窓から眺めな

くてもよいではないか。」(p. 171)

要するに、ゴーラはインドの改革のため、ブラーフマ・サマージのように西欧から摂取することにあくまで反対だったのである。

VI

ポレシュ翁はヒンドゥ教の寛容性を否定して、ヒンドゥ社会の閉鎖性を非難する。「ヒンドゥ社会は外部に対して入口を閉じている。全人類のものではなく、ヒンドゥとして生れてくるよう運命づけられている人々だけのものだ。回教は全人類に門戸を開放しており、キリスト教社会も全人類を招き入れてくれるだろう。迷宮への入口を知るのは簡単だが、一たん入ってしまうと迷宮から出にくいものだ。ヒンドゥ教社会はそれと全く逆で出口が何千とあるのだ。」(p. 523)「昔はヒンドゥ教もそのとびらをひらいて、多くの非アーリア人を受け入れたものだが、今のこの状態では、むしろ回教徒の数の方が多くなって、インドはヒンドスターン（ヒンドゥの国）と呼ばなくなろう。」とヒンドゥ教の狭量性を批判して警告を発するのである。

ヒンドゥ教が伝統や因習、形式的な經典の権威にいつまでも寄りかかっていたのでは、色あせた生命のないものになってしまう。世界に通じる道が開けたのに、いつまでも自分の殻に閉じこもっていたのでは、世界の変化や動きに対処できなくなるだろう。歴史の重みから解放されて、過去に拘泥せずに、現代可能なことをみつけて努力すべきだと進取の精神を説く (p. 143)。

ポレシュ翁はあらゆる宗教に寛大であった。彼の求めたのはヒンドゥ教、回教、キリスト教中の共通の宗教的真理をさぐり、そこにヴェーダやウパニシャドの根元的な真理を見出そうとしたのである。いわば、一神教的色彩を強くするのはブラーフマ・サマージの宗教理念であった。本小説では、ヒンドゥ教と回教の対立はとくにとり上げられていない。ヒンドゥ社会にくらべて回教徒社会の方が団結力のあることはゴーラも認めている (p. 540)。

ヒンドゥと回教を一つにしようとの試みは、すでに16世紀のカビールの宗教合理化論にあらわれており、タゴールもカビールの思想の影響を受けている²⁰⁾。回教徒の農村でヒンドゥの床屋が回教徒の養子を育てており、ゴーラに向かって「ヒンドゥと回教徒は何がちがうのか。われわれがハリ（神）とよぶのを彼らはアッラー（神）とよぶだけのことだ。」(p. 217) というのは明らかに、カビールの思想そのものである²¹⁾。

ヒンドゥ社会に特異な、人間性を無視した時代おくれのカースト制度の弊害をブラーフマ・サマージの人々がどのように非難していたかは、ポレシュ翁のことばによってうかがわれる。人間が人間を下げずみ、憎み合うことのみにくさを、人道主義者ポレシュ翁ははげしく非難する。「側で猫が飯を食っていても気にとめないのに、飯を食っている部屋へ人が入ってくると（汚れたこととして）飯をすててしまうというような人間の侮辱、憎悪はカースト制度からよってくるものであり、低劣といわずに何と言おうか。人間をこんなにもひどく軽蔑する人間は、他人からの軽蔑にも耐えねばならぬだろう。」(p. 198)

形而上上の平等がとなえられても、実際は寺院へ入ることさえ禁じられている低いカーストの人々がいることに、そしてそれを許している社会に、彼は義憤を覚えるのである。

人を侮る者は、軽蔑をもって報われると、タゴールは祖国インドへの悶悶たる情を、「ギーターンジャリ」108番²²⁾にうたっている。

VII

クリシュノドヤールの病床で、クリシュノドヤールとアーノンドモイがゴーラに出生の秘密をうち明けたとき、余りの衝撃にゴーラは愕然として、一瞬自分の生涯を夢のように感じる。幼少時から今日まで自分の生涯を支えてきた礎がくずれ去ってしまって、自分自身が分らなくなるのだった。彼の前には、過去もなければ、熱望していた輝かしい未来も完全に消え去ったのだ。彼の存在は蓮の葉の上に宿る露のしずくの如き一瞬のはかないもののようなようだった。母もなし、父もなし、国もなし、名もなし、カーストもなし、拝むべき神もない。完全な「無」のみが彼の前にあった (p. 584)。英人の医者を見て、今まで本能的に敵意を感じていたイギリス人が、実は自分に一番近い親族だったのかと奇妙な念にかられる (p. 585)。

すべてを失ったゴーラは、しかしポレシュ翁の前にあらわれて、自分はもはやヒンドゥでないことを告白し、束縛のない自由の身になったことを、むしろ晴れ晴れとした気持で語るのである。

「インドの北から南までのすべての寺院の戸は今や私に閉じられたのです。国中のヒンドゥの祭礼で私が食事をとるための席はもはやないであります。」「私は今や自由の身になりました。私にはもはや、ヒンドゥとしての道からはずれて墮落したり不浄になったりはしないかという恐怖はないのです。もはや、自分は清浄を保つために、一步一步地面を歩むごとに気を配らなくてもよいのです。」「今まで自分はインドを理解するために満身の努力をしてまいりました。至るところで障害にぶつかりましたが、あらゆる障害をば、自分の崇拜の対象と調和させるべく、日夜ただ努力をしてきました。この崇拜の基礎を頑丈なものにする努力のために、外の仕事が手につかないほどでした。」 (p. 588)

「今日、一瞬にして束縛から解放されて、気がつくとい自分は急に一つの巨大な真理のまん中に立っていたのです。インドのあらゆる善・悪、幸・不幸、知識・無知の中に立っているのです。」「私は今、真にインドに奉える者の資格をえたのです。真に活動の場におどり出たのです。それは自分自身の内なる場ではなく、外の2億5千万大衆の真の至福の場なのです！」

「私が日夜欲していたけれどもなれなかったもの、それに今私はなることができたのです。私は今、真のインド人となったのです。今や私には、ヒンドゥでも回教徒でもキリスト教徒でも、どんな社会でも反対はないのです。インドのすべてのカーストが自分のカーストであり、インドのすべての糧が私の糧なのです。」「幼少時より今日まで私をつつんできた虚偽や不純を完全にこわしてしまって、新しい生命の息吹を与えてくれるよう私は神に祈りました。」そして、「あなたの

もとにこそ、自由の^{モン・トロ}賛美歌があるのです。その^{モン・トロ}賛美歌を私に与えて下さい。ヒンドゥ、回教徒、キリスト教徒、ブラーフマ、すべての人に門を閉ざさぬインドの神の^{モン・トロ}賛美歌を。」(p. 590) といってゴーラはポレシュ翁に帰依するのだ。そして、アーノンドモイを再び母とよび、「あなたこそ至福の像だ。あなたこそ私のインドだ」(p. 592) とほめたたえるのであった。

すべてを失って無になった瞬間からゴーラはあらゆる束縛から解放され、自由の身として生れかわり、こんどはあらゆる「真理」を手にしたのであった。それはカースト、宗派を超越した絶対無二の「真理」すなわち、「インドの神」だったのである。

タゴールの求めたものは実にこの真理にほかならない。「真理はブラーフマ・サマージよりも偉大」(p. 374) だったのである。

— 完 —

註

- 1) ベンガリ語では、ロビンンドロナート・タークルと発音される。タゴールというのは英語流に訛音したものである。
- 2) 1913年受賞。
- 3) 1907年より2年半にわたって、雑誌 'Pravāsi' に連載され、1910年、単行本(上下2巻)として出版された。ここで底本として用いたのは、Viśvabhārati, Calcutta 発行1964年版である。
- 4) J.N.Farquhar, 'Modern Religious Movements in India' London 1929, p. 2
- 5) 板垣与一, 「アジアの民族主義と経済発展」 p. 272—p. 279
- 6) R.C.Majumdar, 'Glimpses of Bengal in the 19th Century' Calcutta 1960, p. 3
- 7) Rāmdhārī S.Dinkar, 'Sanskṛt kē Cār Adhyāy' Patna 1966, p. 541
- 8) 19世紀初頭において、サティの風習はベンガル州において一番顕著で、1818年には839人、1828年には463人が記録されている。(辻直四郎編「南方民族叢書印度」p. 122)
なお、ラーム・モーハン・ローイ自身の兄が死んだとき、その妻もサティとなって火中に身を投じたことが彼にとって大きな衝撃だったといわれる。(Rāmdhārī S.Dinkar 前掲書 p. 542)
- 9) Srikumār Bandyāpādhyāya, 'Banglā Sāhityer Vikāser Dhārā' Calcutta 1967, p. 17.
- 10) J.N.Farquhar 前掲書 p. 38
- 11) なお、インド・ルネサンスを論ずる場合、ブラーフマ・サマージと 同じような働きをしたアールヤ・サマージやラマクリシュナ・ミッション、それに別個に回教徒の覚醒についても当然考慮すべきであるが、「ゴーラ」とは直接の関係はないのでここでは触れない。(「アジアの民族主義と 経済発展」 p. 288—p. 301参照)
- 12) ゴーラとは「皮膚の色が白い」ことであり、転じて「西洋人」とくに「イギリス人」の意にもなる。
- 13) タゴールが意識していたかどうか分らぬが、このタゴールの 風貌の描写は、タゴールの 青年時代の 風貌をほうふつさせるものがある。タゴール自身、健康で均整のとれた躰つきをしていた。(Sukumār Sen, 'History of Bengali Literature' New Delhi 1960, p. 275)
- 14) 1857年、セポイ(インド人傭兵)の起した反乱で、植民地支配に対する 最初の民族的反抗 として史的意義は大きい。なお、反乱を起したセポイの中で、ベンガル軍のセポイが最大であった。
- 15) 片山敏彦, 「泉のこだま」(アポロン社) p. 159

- 16) Srikumār Bandyāpādhyāya 前掲書 p. 196
- 17) R.C.Majumdar 前掲書 p. 8
- 18) 'Gitāñjali' Viśvabhāratī, Calcutta 1964, p. 129
- 19) 辻他訳, 「インドの発見」 p. 73
- 20) Rabindranath Tagore, 'Poems of Kabir' London 1962参照
- 21) Rāmkumār Varmā, 'Sant Kabir' Ilāhābād 1967, p. 87
- 22) 'Gitāñjali' p. 176